

LCIC（ラブラプセブ国際大学）現地視察研修に関わる報告書

教育学部 教育学科
准教授 長澤 希

1. 研修期間

令和6年2月19日（火）～2月21日（木）

2. 同行者

教育学科：森哲之先生、平山裕基先生

BECC：Craig先生、Krista先生、Matthew先生

3. 現地視察日程

■令和6年2月20日（水）

9:00_ホテルからLCICへタクシーで移動

11:00-11:40 学生寮視察

11:40-13:00 その他施設視察、学生食堂にてランチ ※武田理事長も同席

13:30-15:00 授業視察、理念レクチャー

15:20_視察終了

4. 視察の詳細

■11:00 すぎに大学に到着

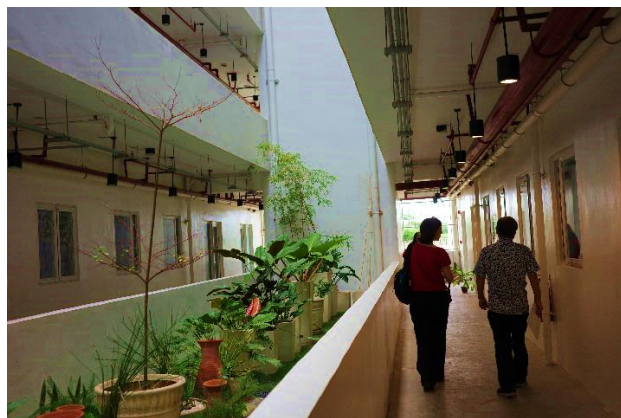
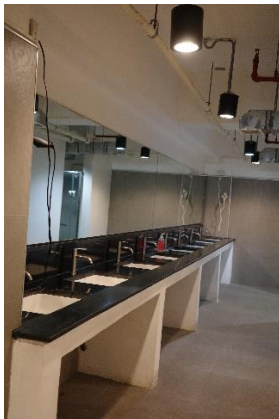
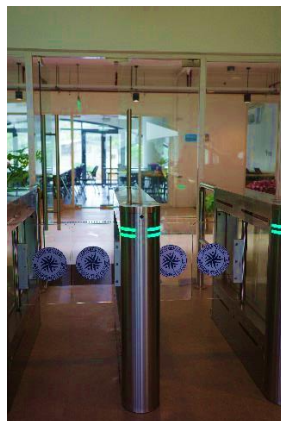


↓大学ゲートから外に向かうキャンパス内の道



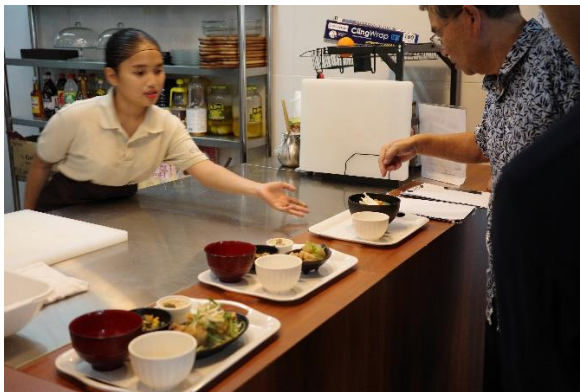
■ 11:00～学生寮視察

- ・ 学生寮の入り口のゲートセキュリティは厳重で安心感がある
- ・ 建物中は吹き抜けになっていて3階の吹き抜け付近にセーフティネットが施されている
- ・ 4人部屋は十分な広さ
- ・ 男子寮と女子寮に分かれている
- ・ 電子レンジ、冷蔵庫が設置
- ・ 歓談のための机は用意されていない※勉強の空間が維持できるよう
- ・ シャワールーム、サウナルーム、温泉、ウォシュレットトイレ、鍵付きロッカールームが完備



■ 11:40～ ツネイシホール、学食視察

- ・ ツネイシホールにて、飯田さんより常石と本学のつながりについて英語でレクチャーを受ける
- ・ クリニックには看護師が常駐しており、歯の治療を受けることもできる
- ・ 学食は、メニューが毎日変化する2～3種類から自身で選ぶ形式。学生もおいしいと言って食べていた
- ・ ちょうど学生も昼食時で、学食が賑わっていた
- ・ 本学の教育学科の学生2名とも再会を果たした



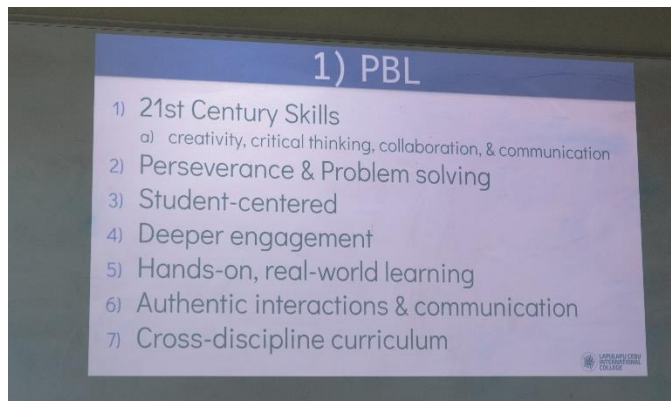
■ 13:00～ ライブラリー、オフィス視察

- ・学長 Grace R.Gorospe-Jamon と対面、歓談
- ・学長にオフィススペースに案内され、オフィスで働く方々に挨拶
- ・韓国人、台湾人、日本人、フィリピン人と国際色豊かな職場となっていた
- ・オフィスが広々としており、労働環境が整えられていることがうかがえた



■13：30～ LCIC の教育理念についてレクチャーを受ける、学生の授業観察

- ・ M.Ed Mark Ryen Anderson さんより、およそ 40 分間のレクチャーを英語で受ける
- ・ これからの世界に求められる能力やそれらを養うための LCIC の教育理念・教育実践についてスライドを用いて説明していただいた



- ・ 学生は様々な言語やカルチャーをもつ講師陣の授業を受講していた
- ・ 実践やグループディスカッションを踏まえて授業をしている様子がうかがえた
- ・ 少人数やマンツーマンでの授業が印象的であった



■留学中の学生の様子

- ・ 学食で会った留学中の学生にインタビューをしてみた *学年は留学当時

(教育学科4年_Mさん)

「就職前で不安だったが、本当に来て良かった。まだ数日だがさまざまな国の友達ができた。オールイングリッシュの授業に頑張って追いつきたい。勉強の意欲が増した。」

(教育学科4年_Mさん)

「英語力もつくし、みんな心が解放されていく。ゆったりしていて、気持ちが落ち着く。」

(教育学科1年_Fさん)

「もっと日本にいる文教のみんなに留学の良さを知らせたい。もっと宣伝すべき。絶対にみんな来るべき！様々なカルチャーを知ることができて毎日が刺激的。とても勉強になっている。」

- ・ 他学科の学生にも複数出会ったが、顔見知りの教員の来訪を体いっばいに表現して喜ぶ様子が見られた
- ・ GC 学科の卒業生が卒業後に留学に来ているという状況もあると知った
- ・ 本学以外の日本人学生の姿も複数見られたが、どの学生も生き生きとした表情で楽しんでいたことが印象的であった

■現地研修を終えて

本研修での体験は、とても刺激的で大変充実したものとなった。実際に行かなければわからないことが多々あり、留学の一端を体験したことで実感を伴って学生に伝えることができることは、これからの学生指導に生かせることであるとする。本研修を通して印象に残ったことや学んだことについて、以下の2点にまとめる。

1つ目は、留学中の学生の満足感が高いということである。すべての学生と話をすることはできなかったが、会って話をできた学生は口々にこの留学の良さを語っており、マイナスな側面を口にする学生はいなかった。何に満足感を感じているのかを尋ねたところ、違う国の留学生との交流の充実、寮の安全性、食のおいしさ、水回りの充実、ということであった。他国の友人ができることが最大の魅力であり、さらに衣食住において不自由なく安全が保たれているということが、魅力の1つであると理解できた。

2つ目は、フィリピンの土地や環境がもたらす学生の変容についてである。アドバイザーの飯田さんによると、日本人留学生の多くがここに来たときには自分の意見すら述べられないが、留学を終える頃には心が解放されていき、性格まで明るくなって帰っていくというのである。1年間の長期留学をした学生のなかには、その変化が顕著であったという学生もいるとのことである。それは、学内の学びだけでなく、フィリピン人の学生が日本人や他国の学生を連れて街に出て、現地の文化に触れ、現地の人々との交流の機会を多く持っているためであると話されていた。このような日常の経験が、自身の価値観を変容させていき、立ち居振る舞いまでも変えていく。例えば、日本では堅苦しい厳かな雰囲気の中で式典が行われる文化であるが、ツネインホールでの式典等は、学生が舞台上で踊ったり歌ったりして和やかに行われる。そのような式典でも、心が解放されて肩の力を抜いて楽しむ学生が多々見られるという。このような細やかな学生の変化に気付いてくださる方が常駐されていることも、学生が安心して過ごせる環境を作り出している要因であると感じた。我々も現地のスーパーマーケットを訪れたりホテルで現地の人々が働く様子を見たりするなかで、フィリピン人のおおらかさに触れる機会が何度かあった。日本とはまるで異なる文化に触れることで、改めて自国の文化を知り、さらにはその文化のなかに在る自分自身についての考えを見つめ直す機会になると考えた。

本研修に行く前までは、正直なところ LCIC の良さについて不透明であった。しかし、本研修を終えて、留学中の学生が話すように「人にすすめたい」と思える留学であることの理由を、一端ではあるが実感を伴って理解することができた。余談にはなるが、同行者の BECC の先生の日本人のご家族と話をさせていただいた際に、「もし自分の子どもがフィリピンに留学したいと言ってきたら、治安は大丈夫なのか？危険な目に合わないか？衛生面では問題ないのか？と様々な不安が出てきて躊躇してしまう。しかし、留学先の大学のセキュリティが安心できること、現地の学生がいてレクチャーを受けることができること等の実態を知ると、安心感が増した。さらに、実際に留学した学生の声を聞くともっと納得感が生まれた。」と話されていた。この話から、学生のみならず保護者が安心して留学させることができる、ということをこれからの広報に見える形で伝えていく必要があるのではないかと感じた。あとは、本学とのカリキュラムとの兼ね合いである。学科の教員としては、留学を希望する学生すべてに留学をさせてあげたいが、実習や授業のことを考えるとこれまでも積極的に進めることができなかった。LCIC で認定された 60 単位が日本の大学の卒業単位として認定されると宣伝されているが、学科の実態から見ると現実的ではない。一方で、教育現場において求められるスキルには、英語力や多文化理解、コミュニケーション能力といったものが挙げられ、それらは本留学においても十分に養うことができる環境が備わっていると感じた。本留学を本学の魅力の中核に据えるならば、実現可能なカリキュラムの兼ね合いを整えていく必要があると改めて考えた。私自身がこれからできる身近なことについて考えたが、まずは本研修の経験を踏まえて、留学について躊躇していたり不安に感じたりしている学生の話聞くこと、実現可能な留学時期を一緒に考えること、そのようなことから始めていきたいと思う。留学を通して変わりたい、変わろうとする学生の意志を潰すことなく、自己実現に向かう学生の背中を押すことができるよう、これからも努めていきたい。